『源氏物語の語義の研究』について

――根来司氏の「書評」に答えて――

山崎良幸

まえがき

小著「源氏物語の語義の研究」に対する根来氏の「書評」は本誌第117集に掲載された。本稿は或は氏の「書評」が出された直後に書くのが適当であったかとも思われるのであるが、同氏の折角の御厚意に対して反論めいたものを書くことが躊躇されたので、こうして一年近い月日を過してしまったのである。成程単なる反論であるならば、それはむしろ無用のことのように思われるのであるが、しかしながらこれは学問の根本的な態度や方法ともかかわりをもつことなのである。加えて、小著は既にかなりの読者を得ているわけであるから、根来氏に対してだけでなく、そうした多くの読者の御好意に対しても、私の学問上の立場を明らかにしておくべき責任を感ずるのである。しかして従来の語義研究のあり方と私のそれとを対比していただくことによって、語義研究の将来において、何らかの資となし得るものが見出されるならばさいわいだと考えて、敢えて稿を草したわけである。

まず根来氏の小著に対する不満についてお答えし、それに対する大方の批判を請うことにしたい。次に私の根来氏に対する不満と希望も申し述べさせていただくことにしようと思う。

一、根来氏の不満について

根来氏の「書評」における小著に対する不満はおよそ次の四点に整理することができるであろう。

㈠書名は「源氏物語の語義の研究」であるが、「それは見られるように形容詞の研究」である。(30頁)

㈡「従来多くの学者が文脈による語義解明の方法をとるのに対し、氏は用例による語義究明の方法を重んじようとされる」として、私のことばを一部分抄出した後、「しかし山崎氏のこの方法はいましがた掲げた犬塚旦氏の『王朝美的語詞の研究』をはじめおおむねの学者がとられた方法であり、(中略)どこまでが先人の研究でどこからが氏の新見であるかが不明確である」(32頁)と云われ、小著における「をかし」の研究の結論と、岡崎義恵氏の「をかし」に関する「論文の要約」とを併記して示された。

㈢小著は松尾聰氏の「うつくし」「おもしろし」に関する研究や、諸家の「をかし」の語源説にも触れていないとされ、「氏はこうした先学の説には一顧だにされないのである」(33頁)と厳しく質された。

㈣「山崎氏はよく美意識という言葉を使われるのであるが、いったい美意識とは何か、それについては述べて」いない。(33頁)

右の四点について、順次私見を記すことにする。

㈠小著はもともと源氏物語の注釈書類において、源氏を文芸として読む上に大事ないくつかの語の意義が精確でないことに気づき、

それを正そうが為に書かれたものであって、形容詞の研究が目的ではなかった。もしかりに「形容詞」の語を冠するならば、それは文法機能の研究の意味をもつことになるのである。根来氏はそれに気づいていられないようであるが、このことは重要である。また小著では「うたて」の語も取り扱われていて、いうまでもなくこれは形容詞ではない。実は「あはれ」の研究も入れる積りであったが、それだけで優に一冊の本になりそうなので、出版の場合の実際的問題を考慮して次著に譲ることにした。第三篇「心情表現の語」のところで「心情表現の語の意義について」において、うっかり「語」を「形容詞」と誤ったのは、私の軽率によるものであって、読者に対して深くお詫び申し上げたい。

㈡根来氏は小著における語義究明の方法を、従来の「おおむねの学者がとられた方法で」(32頁)あるように云われるのであるが、それは小著の意図する内容を充分に理解されていないところから来る全くの誤解である。何よりも小著の第二章「語義研究の方法」をもう一回じっくりと読み直していただきたい。単なる文脈による考察だけで語義がわかるのであれば、諸家の考察の結果がまちまちになることはあり得ないはずである。「一体文脈そのものが、一般に考えられているように、本来必ずしもそのように容易に捉えられるというものではないのである。(中略)それではどのようにすれば客観的にも正しい語義を究明することができるのであろうか」(小著12頁)私の用例による語義究明の方法を自己流に解されては困るのである。一体小著において述べている方法、並に私の語義追究における作業過程は、氏の云われるように、従来のそれと必ずしも同じではないはずである。小著で扱った語に関する限り、私はその用例のすべてにわたって、単にその語の用例に当るというだけでなく、その前後の文章を抄出して手許にもっているのである。このことを完全になさっているのは、或は松尾聰氏位ではなかろうか。しかもそれらの用例に対する処理のし方は、氏と私とでは必ずしも同じではない。それは国文学者と言語研究にたずさわる者との違いから生ずることなのであろう。私の研究は、どこまでも注釈作業に役立てようがために、純粋に語義だけを取り出して考察しようと試みたものなのである。こうした点を顧慮しないで、大ざっぱに読まれると、小著の意図している作業過程の大事な点が看過されてしまうことになるのである。

私は、途中までは人の研究により、そこから先を自分で研究するというような方法を取ってはいない。そういうことは事実不可能なのである。途中までが人の方法と同じであれば、そこから先も結局同じことになるのではなかろうか。そういう学問に対する根本的な態度において、根来氏と私とでは考えを異にしているのである。私の書いていることは、誰のものでもなく、すべて私自身の作業によって捉えられたものなのである。岡崎氏の「をかし」の論と私のそれとの違いは、注意深い読者には恐らくわかっていただけるはずである。しかして文芸学的にではなく、純粋にその語の概念内容だけを取り出して考えた場合、何れによられるかは読者の評価に委ねるよりほかないであろう。

㈢根来氏の評は、「おもしろし」「をかし」「うつくし」の三語についてのみ云われることであって、他の語に関しては不当な評だと云わざるを得ない。一体他の諸語については、これまで精確な研究はなされていないはずである。特に「すごし」「うたて」「うるさ

し」「『いとほし』と『心苦し』の区別」「いみじ」「『あいなし』と『あぢきなし』の区別」「たとしへなし」等に関する研究は、これまであまりなされていないはずである。「うし」「つらし」「つれなし」については従来もある程度書かれてはいるが、それらとても未だ精細な研究ではなかったし、とりわけ「うし」に対しては「心うし」との意義の上での区別が全く考えられていなかった。「おもしろし」と「をかし」についても、注釈書類における両者の意義の混同についてはこれまで触れられたことはなかったはずである。もっとも「うつくし」と「おもしろし」については、松尾氏に著書がおありであるが、同氏のお名前を特に挙げて批判することはしなかった。氏のお考えと私の考えとの相違は、小著を注意深く読まれれば容易に理解されるはずである。或は根来氏は小著をあまりよく読まれずに「書評」を書かれたのではあるまいか。語源については、ややもすると恣意的な論に陥り易いので、あまり深入りするのを避けた面がある。中でも「をこ」が「をけ」から生じたという説は、小著の出版後吉田金彦氏から直接私信で御教示いただいた。同氏の御厚意に対し心から謝意を表したい。

根来氏が「先学の説には一顧だにしていない」と云われるのは、少し云い過ぎではなかろうか。小著はどこまでも注釈のための「語義の研究」なのである。文芸学的研究でもなければ美学的研究でもない。もし語義の研究として歴史的に価値ありと認められているのであれば、それは最近の辞書や注釈書類に採用されているはずである。そうでないものにまで論を広げるのは、小著のめざすところに添わないばかりでなく、それでは恐らく一語で大冊をなすか、或は自分自身の最も大事な語義の追究そのものが疎漏にならざるを得ないことにもなるであろう。私は語義の追究という作業そのものに叙述の大部分を用いたのである。そればかりではない。注釈の実際を精査するだけでも容易ではないのである。私は「全書」の注の全部に当り、かつそれを書き取ったのである。他の注釈書類には必要に応じて当ったわけであるが、それだけでも非常な時日を要するのである。そういう苦労を経ないで、安易な言辞を弄するのは学問の発展にとって何の役にも立たないであろうことを知っておくべきである。

㈣私はいうまでもなく美学者ではない。美学を専攻していない者が美について論をなすのは差し控えたがよいと考えたのである。一体よくわかってもいないことについて論をなすのは、むしろ知的公害を流すことにもなりかねないのである。従って私の用いた美意識の語は極めて常識的なものを出ていない。その用い方がもし当を得ていなかったとしたら、それによって私は人々から評価されることになるであろう。

二、根来氏の「書評」に対する私の不満と希望について

根来氏は私の語義研究の結論だけ、それもその一部分だけを抄出して、「これがこの書における氏の語義研究のすべてであった」(32頁圏点筆者)とされた。これは小著に対する人々の誤解をまねくに違いないことばであって、とうてい看過するわけにはいかないのである。一体こういう大ざっぱな表現はどれほど読者の誤解をまねくか知れないのである。そういうことについて氏は考えられたことがあるのであろうか。それはちょうど数学において何枚もにわたる計算をぬきにして、その答だけを取り出して「これがすべてである」

というのに似ている。小著において大事なのは、むしろ語義追究における作業過程そのものなのである。それをかいなでにながめておいて、さてその作業過程から導き出された答の、しかもその一部分だけを抄出して、「これがすべてである」というのでは困るのである。答の当否は、その答えを導き出すに至るまでの作業過程を精査するのでなければわかりようがないはずである。そういう大まかな態度からは、少くとも注釈に役立つための語義の究明は期待し難いであろうことを知るべきである。

最近のある全集物の中で、源氏物語の注釈に関与された学者から私が直接耳にしたことなのであるが、ある語について数人相寄って論議を重ねても遂にその真義が得られず、結局適当な、いわば間に合せの訳語ですませた例が少くないそうである。しかしそれは、わかった積りで注するのに比べれば、はるかに良心的だとも云えるのである。否むしろ、そういう要請にこたえるべく努力することこそ、われわれ国語学を専攻するものに課せられた責務ではなかろうか。しかしてその源氏学者は次の注釈書において、小著の語義研究の結果を取り容れてくれているとのことである。もし小著に何程かの価値があるならば、将来辞書や注釈書が、根来氏の「書評」にもかかわらず、これを採用してくれるであろう。

あまり多くの紙幅をとるのを慮って、そのために云い足りないところも多く、かつ適当でない表現もあるだろうことをおそれるものである。それらの点については、評者並びに大方の御寛恕を請う次第である。（一九八〇、六、七）

——元高知女子大学教授——